

認定実技審査統計調査 (過去3年間の成績分析)

(公財)柔道整復研修試験財団

1. 認定実技審査結果の統計調査について

- 審査員間及び学校間に存在する評価のばらつきや評価傾向について、平成24年度から平成26年度の3か年分の認定実技審査についての整復実技審査結果データを用いて検証を試みた。

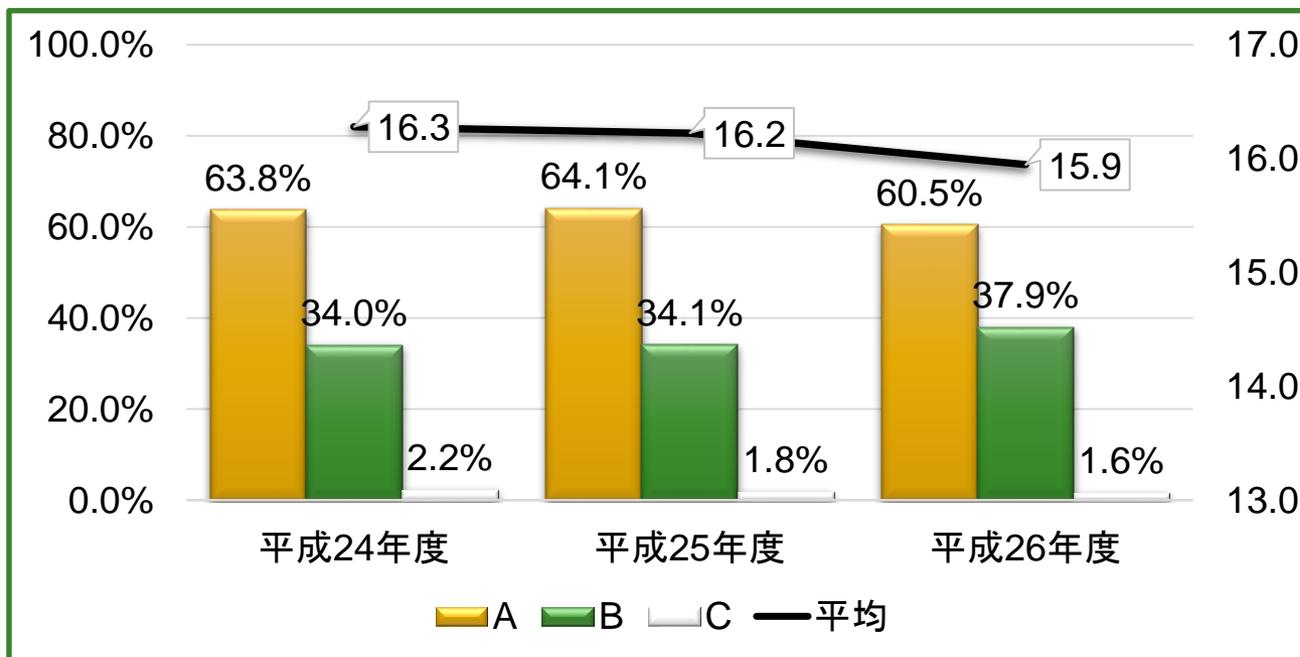
2. 学校数と受審者数の変化

- 3か年の認定実技審査実施の学校数は3か年を通じ、ほぼ横ばいであるが、受審者数は増加している。平成24年度→平成25年度において1校廃校、2校新規参加。平成25年度→平成26年度において1校廃校。よって、3か年で93校が審査をしている。

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	3か年(延べ)
学校数(校)※	91	92	91	274
受審者数(名)	5,055	5,150	5,344	15,549

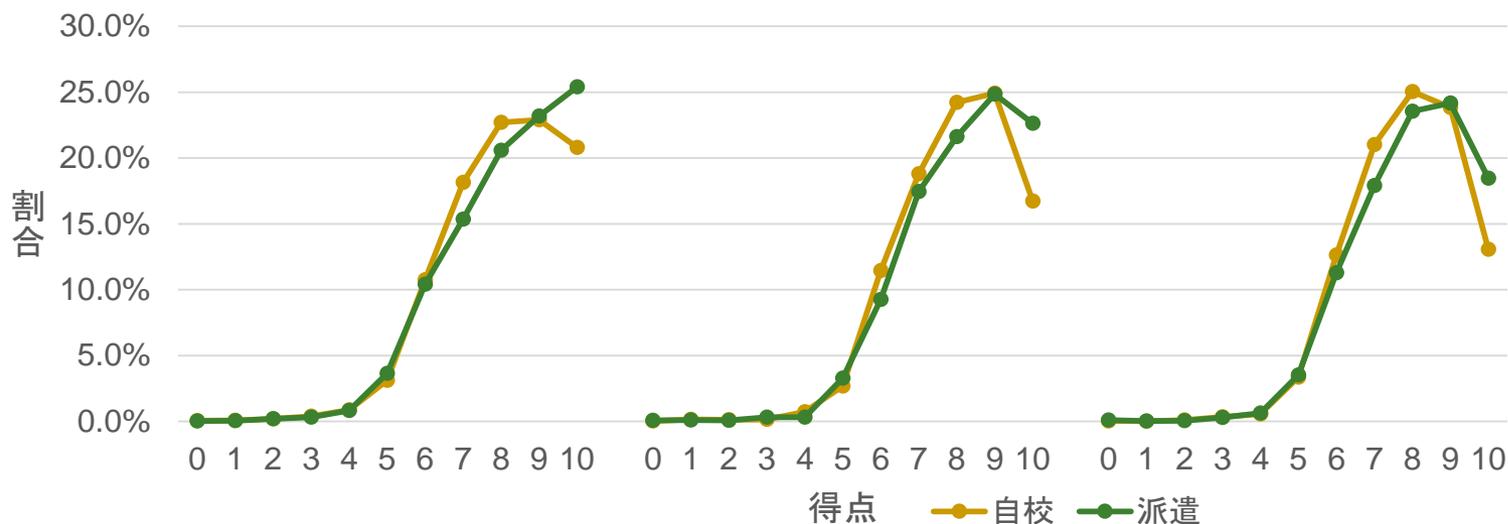
3. 全体の評価割合と平均点の推移

- 各年において最高点は20点、最低点は0点で、平均点は16点前後となっている。



4. 各年度での自校審査員と派遣審査員の採点分布

- 各年度で、審査員の採点を比較したところ、各年度とも派遣審査員が自校審査員よりも右寄り、つまり高得点寄りとなっている。



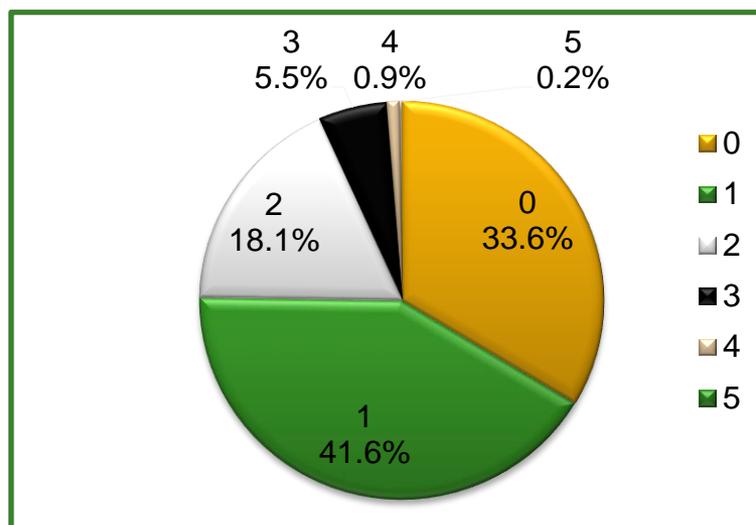
5. 自校審査員と派遣審査員の平均点と検定結果

- 平均点においても、大きな差ではないが、自校審査員に比べ、派遣審査員が有意に高めの点数をつけている。(対応のあるt検定を有意水準5%で検定、Wilcoxonの検定)

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	3か年 (延べ)
平均	16.3	16.2	15.9	16.1
平均(自校)	8.1	8.0	7.9	8.0
平均(派遣)	8.2	8.2	8.1	8.1

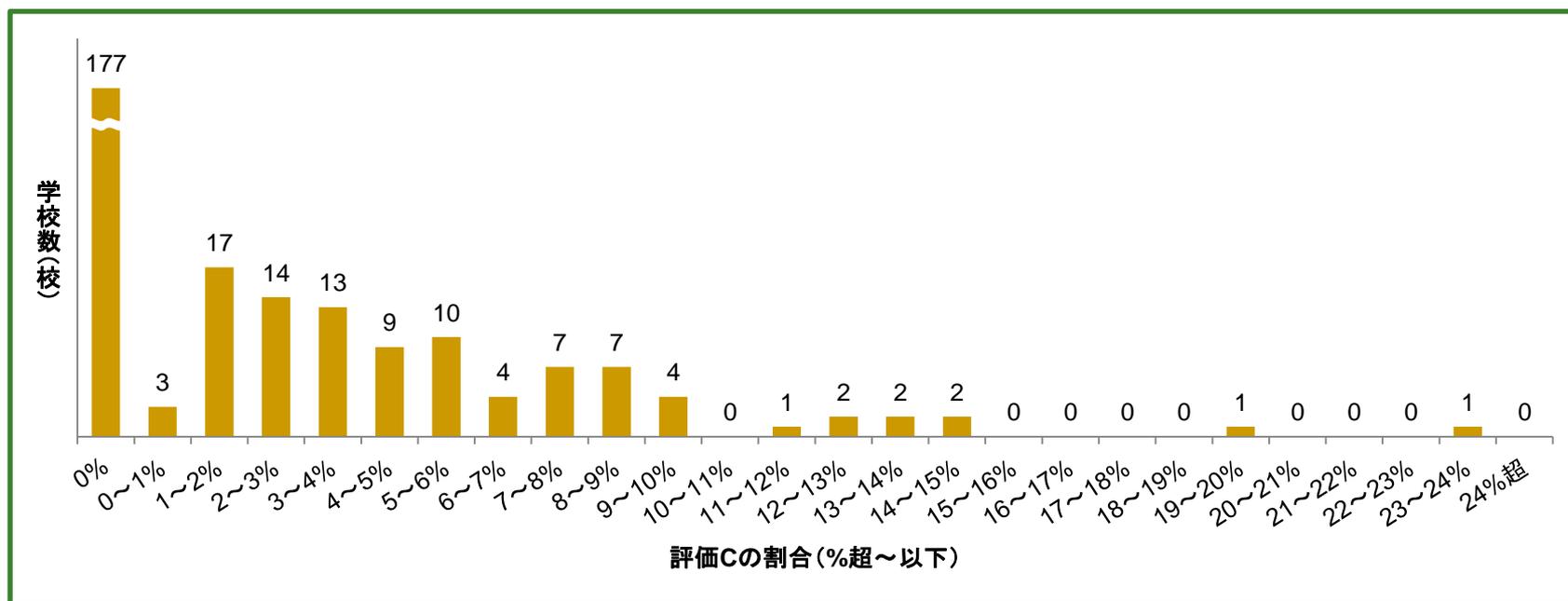
6. 自校審査員と派遣審査員の採点差

- 各組における審査員の採点差を見ると、0点から2点差が93%、採点差の平均は3か年で0.99である。この結果から大きな採点差が生じ難く、審査方式は良好な状態であるとみられる。



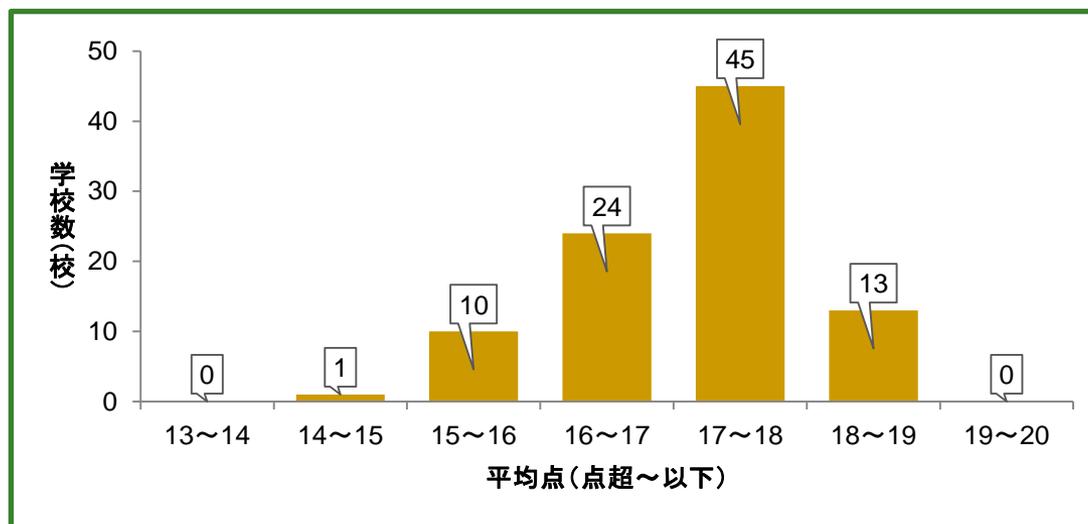
7. 学校別 評価Cの割合分布

- 3か年を通して全体でC評価の割合は1.9%であった。65%の学校において、C評価の割合は0%以下であった。



8. 学校別 平均点の分布

- 3か年で全体の平均点は16.1点であった。88%の学校において平均点はB評価以上となる15点を超えており、残り12%の学校において平均点が15点以下であった。



9. 級内相関係数を用いた調査

- 認定実技審査は一人の受審者について、組となった自校審査員と派遣審査員2名で審査を行うため、審査員間の一致度を測る指標として級内相関係数を用い、調査した。
- 級内相関係数は、ある検査の検者間または検者内信頼性の指標として用いられる統計学の指標。最高が1となる値で、この分析では0.4以上であるとき、その組は良好な一致度であるとし、級内相関係数が0.4未満であるとき、その組は一致度が低いと考え、評価した。

10. 学校別の級内相関係数

- 学校ごとの級内相関係数の平均と平均点の間で目立った相関はみられなかった。このことから、学校の平均点が異なっても級内相関係数に影響しないということが言え、審査員間の一致という意味では評価できる。
- 全体の級内相関係数の平均は0.49であり、全体では良好な一致度であるといえる。学校別で見ると、75%の学校で級内相関係数の平均が0.4を超えており、良好な状態とみられる。

11. 統計調査のまとめ

- 今回、派遣審査員と自校審査員の採点について調査した結果、自校審査員が自校の学生に採点を甘くするといった傾向はなく、各組の採点一致度についても比較的良好な状態である。
- このような審査結果の統計的分析調査により、今後も継続的にデータを蓄積し、審査方式や審査員の質等を監視していくことが可能である。